

保育施設における「運動遊び」の取り組みに関する研究

守 渉¹

文部科学省の調査では、幼児期の子どもたちの体を動かす機会が減少し、身に付けておくことが望ましい多様な動きの獲得や体力・運動能力に影響を与えていると指摘されている。そのため個々の成長・発達に適した運動経験の場として就学前のほとんどの子どもが利用する幼稚園、保育園、認定こども園の役割は非常に大きいものである。

本研究の目的は、保育施設における「運動遊び」に関する実態調査を実施し、保育の実際などを整理しながら、具体的な運動遊びの傾向や保育士がどのようなことを課題ととらえているのかを明らかにすることである。そこで、主に運動遊びが行われている園庭、遊戯室（ホール）、保育室の三か所における運動遊びの実態を把握するために、保育士を対象としたWEBアンケートを実施した。

その結果、次の3点が明らかになった。①保育施設では、園庭、遊戯室（ホール）、保育室それぞれの場所の特性を活かした運動遊びが行われている。②運動遊びの際に、保育士自身も幼児と一緒に体を動かして遊んでいる割合が高い。③保育士は活動中の幼児の姿から、幼児の運動遊びの経験（生活経験）不足や体の操作が未熟であることを課題と捉えている傾向があった。

Keyword：幼児、運動遊び、保育園、保育士、保育内容の指導法（健康）

I はじめに

幼児期の子どもたちは遊びを中心とした活動の中で、多様な動きを経験し、発達に応じた体力や運動能力を身に付けている。しかし、文部科学省の調査では幼児期に体を動かす機会が減少し、身に付けておくことが望ましい多様な動きの獲得や体力・運動能力に影響を与えていると指摘されている。その大きな要因として、子どもを取り巻く環境や子どもの生活全体の変化が挙げられる。現代社会においては、生活全体が便利になったことで、歩くことをはじめとする体全体を動かす機会の減少に伴い、子どもにとっての体を動かす遊びの機会が少なくなっている。この背景には、外遊びの基幹となる3つの間（時間、空間、仲間）が減少したことも大きく、幼児期の子どもが自然発生的に遊びを發展させ、多様な動きを習得することが難しい状況がある。さらに運動遊び自体を好まない幼児や運動遊びに対する意欲の低い幼児の存在も大きく影響している¹⁾。習い事としてスイ

ミングや体操教室などで動きを覚え、運動する子どもと体を動かそうとしない子どもの二極化の問題が指摘されることにもつながっている。

また、「姿勢が崩れやすい」「力の加減がわからない」等の手先や身体を思うように動かすことができない子どもが存在し、僅少ではあるが身体感覚に偏りがある子どもの課題も指摘されている。具体的な運動場面では、すぐに転ぶ、走るフォームがぎこちない、全身をバランスよく使って跳んだりボールを投げたりすることができないなど、自分の体をうまくコントロールできない幼児も増えており、問題視されている²⁾。自分の体をコントロールする力を高めることは、児童期以降の運動技能の習得をスムーズにする³⁾と考えられているため、このような状況は、子どもの発育・発達にも大きな影響を及ぼしていると言える。就学後や青年期以降の運動やスポーツに親しむ資質・能力の育ちの減退、意欲・気力が弱まり、ひいては、対人関係などのコミュニケーションの構築にも影響が及ぶようになると考えられる。

このような子どもを取り巻く環境が変化する中

1. 宮城学院女子大学教育学部教育学科

で、「幼児期運動指針」では「幼児期に必要な多様な動きの獲得や体力・運動能力の基礎を培う」ためのポイントが提示された。具体的には、①多様な動きが経験できるようにさまざまな遊びを取り入れること、②楽しく体を動かす時間を確保すること、③発達の特性に合った遊びを提供することが挙げられた。この策定を受け、2018年に施行された「幼稚園教育要領」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」「保育所保育指針」でも幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の一つとして、「健康な心と体」をあげ、保育内容の健康領域の取り扱いには、「多様な動きを経験する中で、体の動きを調整するようにすること」⁴⁾が加えられ、様々な遊びを通して楽しみながら体を動かすことが求められている。

しかし、地域や家庭において、安心して安全に過ごしながら充実した運動遊びを行う空間的、物的、人的にも良好な環境を整備することはますます困難な状況になることが予想される。そのため就学前のほとんどの子どもが利用する保育園、認定こども園等の保育施設の役割は非常に大きい。そこで関わる保育者は、一人ひとりの幼児の発達段階を考慮し、興味や関心に応じた主体的な運動遊びを引き出す環境を整え、充実した運動遊びが発展していくための援助を行っていくことになる。大木は、ここでの保育者の運動遊びの捉え方、関わり方が活動の内容や展開、活動の充実度に大きく影響していくことにつながる⁵⁾と指摘している。このことから常に、保育施設が個々の幼児の成長・発達に適した運動経験の場となっているのか点検していく必要があると考える。

II 研究目的

前述したように保育園や認定こども園等の保育施設における「運動遊び」について、幼児期に身に付けておくことが望まれる多様な動きを経験でき、発達段階に応じた適切な援助を受けられる環境の構成の在り方に注目する必要がある。その前提となるのが、保育現場の現状を把握し、保育者が幼児の「運動遊び」についてどのようなことを

課題と捉えているのかについて調査し、そこから「運動遊び」に関するよりよい援助や環境の構成の在り方などを検討することだと考えた。

そこで、本研究では、保育施設における「運動遊び」に関する実態調査を実施することで、保育の実際などを整理しながら、具体的な運動遊びの傾向を明らかにする。

主に運動遊びが行われている園庭、遊戯室(ホール)、保育室の三か所における運動遊びの実態を把握することを目的に、保育士を対象としたWEBアンケートを実施する。保育施設で保育士が活動の場として計画的に環境構成を行う場所は、保育室や遊戯室(ホール)、園庭が主となる。これは、保育室や遊戯室(ホール)、園庭が保育施設等における子どもの生活や遊びの拠点となることが多いためである。アンケート調査により、保育士が日頃の保育で取り組んでいる運動遊びについて整理するとともに、保育士がどのようなことを課題ととらえているのかを探る。

III 研究方法

1 研究の方法と手続き

調査協力園の園長に依頼し、保育士にアンケートの概要を示した用紙と研究同意書を配布してもらった。概要を示した用紙にQRコードを記し、Google フォームによるWEBアンケートで実施した。なお、本調査にあたり、宮城学院女子大学研究倫理委員会の承認を得た(承認番号:第2023-11号)。

2 調査対象

運動会などの行事ができる広さのある園庭やお遊戯会などの様々な行事や活動にも利用される遊戯室(ホール)、各年次のクラスごとの保育室があり、かつ自然豊かで身体を十分に動かすことができる宮城県内の調査協力園(6園)に依頼した。園長や副園長などの管理職をはじめとする、すべての保育士を調査対象とした。

3 調査期間

2023年9月下旬に調査協力園にアンケート調査用紙を配布し、2023年11月までWEBでアンケートを実施した。

4 アンケート項目・調査内容

アンケート項目は、①園庭でよく行われている運動遊び・遊び（12項目から構成され、複数回答可）②遊戯室（ホール）で行われている運動遊び・遊び（12項目から構成され、複数回答可）③保育室で行われている運動遊び・遊び（12項目から構成され、複数回答可）④保育者自身が幼児と一緒に体を動かして遊んでいる頻度⑤運動遊び、遊びの場面で保育士が幼児の課題として感じることにについて回答を求めた。①～③の項目に関しては、大木らの先行研究⁶⁾を参考に、12項目を設定し、より具体的な遊びを示し選択しやすいように構成した。

5 倫理的配慮

調査協力園の保育士に対しては、研究の趣旨と倫理的配慮等について文章及び口頭で説明した。回答の強制は行わず、アンケートの回答をもって同意が得られたこととした。また、アンケートは無記名とし、収集したデータについては個人を特定できない形で分析を行った。

IV 結果

回答者の保育士50名のうち性別は、男性4.0%（2名）、女性96.0%（48名）だった。また、回答者の年齢は、55歳以上が最も多く26.0%（13名）、次いで30～34歳が20.0%（10名）、40～44歳16.0%（8名）、45～49歳16.0%（8名）、35～39歳8.0%（4名）、20～24歳6.0%（3名）、25～29歳4.0%（2名）、50～54歳4.0%（2名）となり、幅広い年齢層の保育士から回答が得られた（表1）。

表1 年齢と性別

	人	%
性別	男性	2 4.0
	女性	48 96.0
年齢	20～24歳	3 6.0
	25～29歳	2 4.0
	30～34歳	10 20.0
	35～39歳	4 8.0
	40～44歳	8 16.0
	45～49歳	8 16.0
	50～54歳	2 4.0
55歳以上	13 26.0	

勤務先は、公立保育所が、40.0%（20名）、私立保育園・認定こども園が58.0%（29名）、認証保育所が2.0%（1名）であった。役職は、園長が2.0%（1名）、主任（副主任）が4.0%（2名）、主任保育士が4.0%（2名）、学年主任（乳児、幼児リーダー）が10.0%（5名）、クラス担任が60.0%（30名）、フリー保育士等が20.0%（10名）であった（表2）。

また、通算の保育経験年数は、多い順に11年～20年が30.0%（15名）、5年～10年22.0%（11名）、21年～30年20.0%（10人）、30年以上16.0%（8人）、5年未満12.0%（6人）から回答が得られた（表3）。

表2 勤務先と役職

	人	%
勤務先	公立	20 40.0
	私立	29 58.0
	認証保育所	1 2.0
役職	園長	1 2.0
	主任（副主任）	2 4.0
	主任保育士	2 4.0
	学年主任（乳児、幼児リーダー）	5 10.0
	クラス担任	30 60.0
	フリー保育士等	10 20.0

表3 通算の保育経験年数（産休・育休期間は除く）

	人	%
5年未満	6	12.0
5～10年	11	22.0
11～20年	15	30.0
21～30年	10	20.0
30年以上	8	16.0

クラス担任と回答した保育士の担当クラスは、2歳児36.7%（11名）が最も多く、1歳児16.7%（5名）、3歳児13.3%（4名）、0歳児13.3%（4名）、4歳児10.0%（3名）、5歳児10.0%（3名）であっ

た(表4)。

表4 担当クラス

	人	%
0歳	4	13.3
1歳	5	16.7
2歳	11	36.7
3歳	4	13.3
4歳	3	10.0
5歳	3	10.0

園庭でよく行われている運動遊び、遊びの項目(図1)は、多い順に「砂遊び(88.0%)」「かけっこ遊び(かけっこ、リレー遊びなど)(72.0%)」「固定遊具遊び(鉄棒、滑り台、ブランコ、ジャングルジム、雲梯、登り棒など)(58.0%)」「自然遊び(58.0%)」「ごっこ遊び(ままごと、お店屋さんごっこなど)(56.0%)」「散歩(54.0%)」「ボール遊び(サッカー、ドッジボールなど)(52.0%)」「集団遊び(氷鬼、バナナ鬼、高鬼などの鬼ごっこを中心とした集団遊び)(48.0%)」という回答であった。

遊戯室(ホール)で行われている運動遊び、遊びの項目(図2)は、「体操、ダンス(68.0%)」「大型遊具遊び(マット、跳び箱、平均台など)(58.0%)」「ボール遊び(56.0%)」が半数以上の

回答であった。

保育室で行われている運動遊び、遊びの項目(図3)では、「ブロック遊び(92.0%)」「制作遊び(工作、粘土など)(90.0%)」「ごっこ遊び(ままごと、お店屋さんごっこなど)(88.0%)」「絵描き、塗り絵(82.0%)」と静的な活動が高い割合を示す結果となった。

また、保育士自身が幼児と一緒に体を動かす頻度についての項目(表5)では「ほぼ毎日遊んでいる(54.0%)」「毎日遊んでいる(34.0%)」と回答しており、日頃から幼児と一緒に体を動かして遊んでいる保育士が多い結果となった。

表5 保育士が幼児と一緒に体を動かして遊ぶ頻度

	人	%
毎日遊んでいる	17	34.0
ほぼ毎日遊んでいる	27	54.0
週に1回程度遊んでいる	3	6.0
あまり遊んでいない	3	6.0

運動遊び、遊びの場面で保育士が幼児の課題として感じること(図4)については、「運動遊びの経験(生活経験)不足(58.0%)」が最も多く、次に「体の操作が未熟な子どもが多い(52.0%)」という回答であった。体力や運動能力に関する項目の「運動能力の低い子どもが多い(34.0%)」

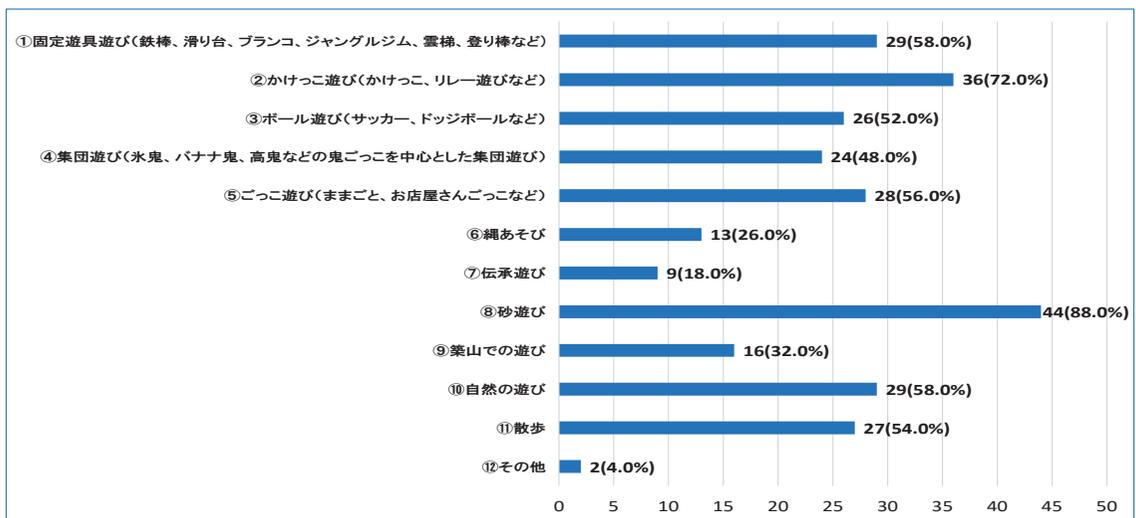


図1 園庭でよく行われている運動遊び、遊びの項目

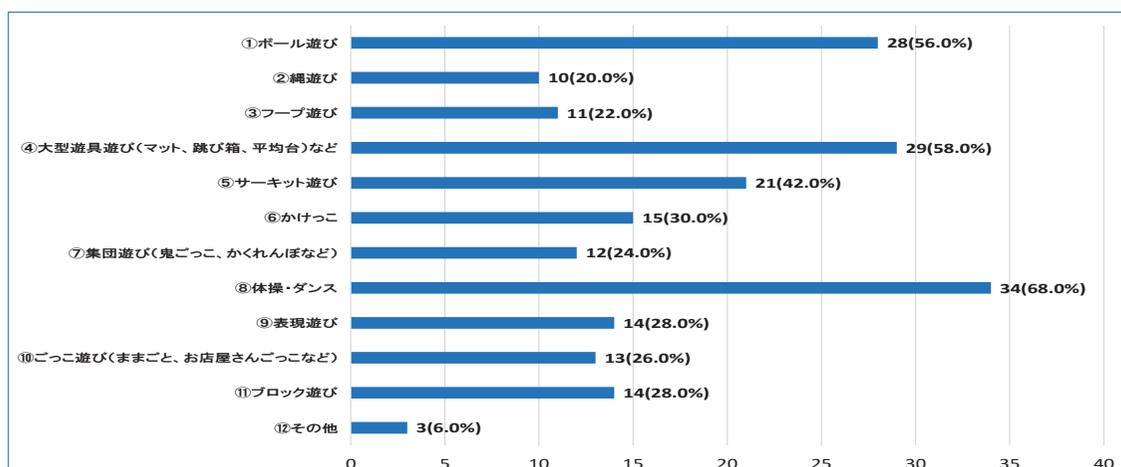


図2 遊戯室（ホール）でよく行われている運動遊び、遊びの項目

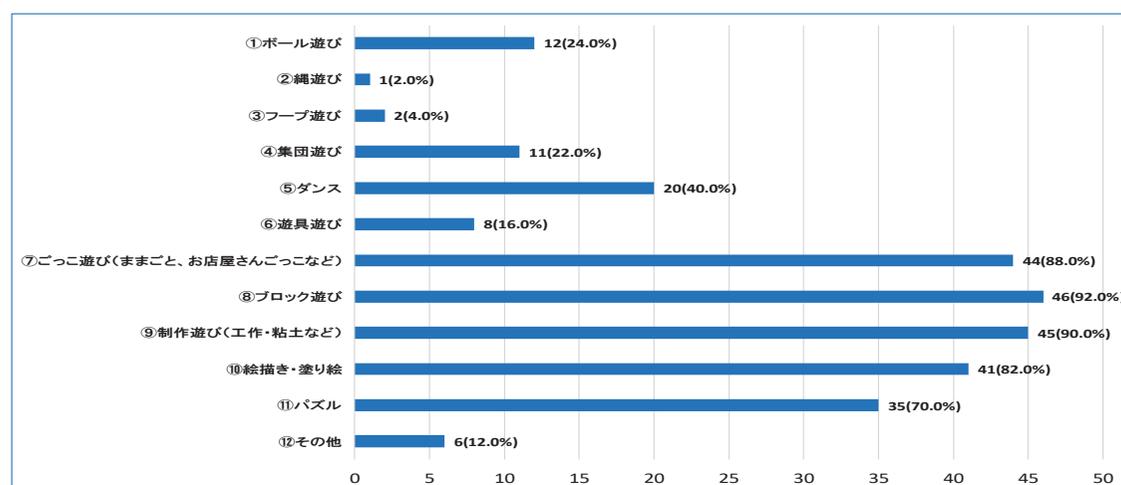


図3 保育室でよく行われている運動遊び、遊びの項目

や「体力の低い子どもが多い (32.0%)」、運動遊びに対する意識に関わる項目の「体を動かすことを好まない子どもや苦手意識を持った子どもが多い (32.0%)」や「体を動かして遊ぶ時間が少ない (30.0%)」はほぼ同数であった。その理由についての自由記述の回答は、以下の通りであった(表6、表7、表8、表9)。

V 考察

1 各活動場所で行われている運動遊び、遊びについて

保育施設内で幼児の運動遊びの主な活動場所と考えられる園庭、遊戯室（ホール）、保育室で行われている具体的な遊びの内容について把握することができた。調査協力園においては、園庭、遊戯室（ホール）、保育室それぞれの場所の特性を活かした遊びが行われていた。

園庭で行われている運動遊び、遊びで、最も回答が多かったのは砂遊びであった。砂遊びはどの

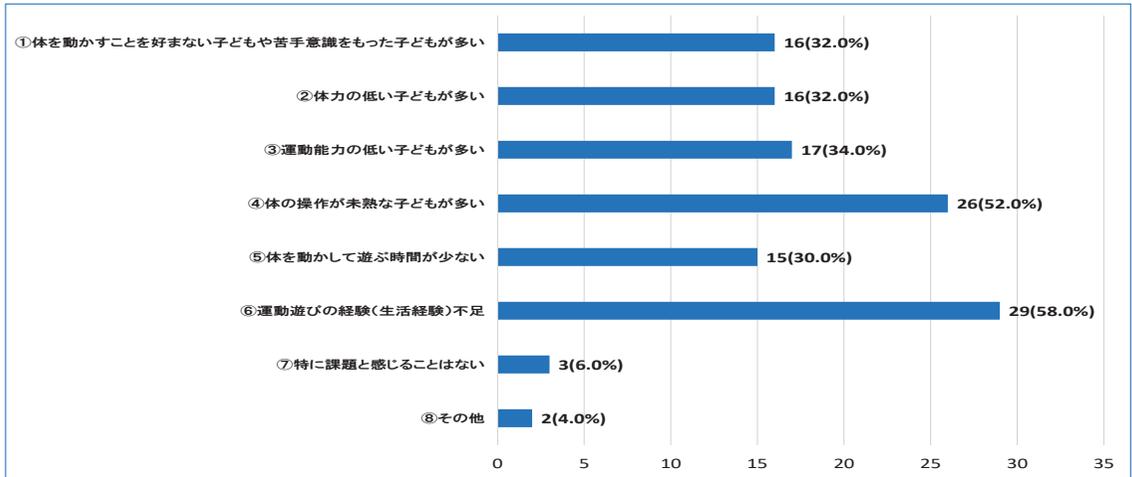


図4 運動遊び、遊びの場で保育士が幼児の課題として感じる事

表6 「運動遊びの経験(生活経験)不足」

- 学年に応じたボール投げ、ボールを受け取る、縄跳びを跳ぶ、縄跳びを結ぶことなど経験不足からできない子どもが多い。
- 安全面を優先するあまり、保育所でも家庭でも運動の機会が少ない。
- 1歳児を担当しているが、午前の活動時間が短いため、体を動かして遊ぶ時間と経験が少ない。
- 近所の公園で遊ぶ機会が少なかったり、公園の遊具が減ったりしている。また、保護者が助けすぎてしまうことがあるから階段やはしごなどの安全な昇り降りの仕方が分からない。(すぐに手を離そうとしたり、高いところで降り方が分からなかったりしてだっこを求める。)
- 道具の使い方も含め、保育園で初めて経験することが多い。
- やりたくてもやり方が分からない、分からないからやらない子どもがいる。

表7 「体の操作が未熟な子どもが多い」

- ぎこちない体の動きの子どもが多く、動きに慣れるまで時間がかかる。
- 平らなところで転ぶ。転んだ時に手が出せないなどの姿を多く見る。
- 運動遊び中にフラフラしてしまったり、うまく手をつけなかったり、すぐに座り込んでしまう姿が多いため。
- 遊具で遊んでいる時にバランスを崩したり、自分自身の体を支えられなかったりする姿が多く見られる。
- 転んだ拍子におでこを怪我する子どもが多々いる。
- 戸外遊び中、よく転ぶ。築山を登ったり下ったりが出来ず、体の使い方が下手な子どもが多い。
- 指先の使い方がわからず、紙を破ったりすることが苦手な子どもが多い。
- くぐる、這う、スキップ、ギャロップなどの動作がぎこちない。ボールに当たらないように逃げる等遊びでは俊敏に逃げられない姿が多くなってきた。
- 転んでも手をつかない。
- 体を動かして遊ぶ際、転ぶ子どもが多いため。

表8 「運動能力の低い子どもが多い」、「体力の低い子どもが多い」

- 通園に車を使用する家庭が多く、入園当初は、散歩などで長い距離を歩くことができないことが多かった。また、走ることが苦手な子どもが目立つと感じる。
- 鉄棒では、昔に比べ、前回り、逆上がりが出来ない子どもが多くなってきたと感じる。
- 少し動くとすぐ疲れたと言ってくる子どもが多い。
- 遠足などで少しの距離を徒歩で移動する場合に、疲れたと言って歩かない子どもがいる。
- どの活動でも、すぐに「疲れた」という子どもが、以前より増えた気がする。
- 走るとすぐに座り込む子どもが多い。
- 鬼ごっこや追いかけてが持続しない。
- 運動能力に差がある場合、クラス全員で楽しめる活動にするのが難しい。運動能力の高い子どもに合わせると、運動能力の低い子どもは見ているだけになり、その逆にすると、今度は運動能力の高い子どもが満足できない状況になっている。

表9 「体を動かすことを好まない子どもや苦手意識を持った子どもが多い」、「体を動かして遊ぶ時間が少ない」

- 他の子どもたちと一緒に活動しようとせず、無関心な姿勢でいることが多い。
- 負けたくないからやりたくないという理由から、勝敗がつく遊びを好まない傾向にある。
- 運動遊びより、一人で集中できる砂場遊びや、木の実や葉っぱ集めに興味を惹かれる子どもが多いのではないかと。
- 思い通り動くことができず、「やりたくない」とその場から動かなくなり、泣き出してしまうことがある。また午前中に体を動かして遊んだ後、昼食中に眠ってしまう子どもがいる。
- 体操など苦手意識があると、座って見ているだけのケースがある。
- 多くはないが、苦手意識や不得意に感じている子どもがいる。

発達段階の子どもでも取り組みやすく、遊びも発展させやすいと考えられる。近年、動物による糞害の衛生面やガラス片の混入などにより安心して遊ぶことができないという理由で、公共の場である公園の砂場が減っている現状がある。しかし、園庭がある保育施設にはほぼ砂場が設置されており、子どもが安心して砂遊びをすることができる環境が身近にあると言える。

園庭における運動遊びで多い回答は、広い空間を活かしたかけっこ遊びであった。広い空間での遊びは、幼児の心も開放され、友だちと共に主体的に取り組むことができると考えられる。次いで多かった回答は、固定遊具遊びやボール遊び、集団遊びであった。鉄棒、滑り台、ジャングルジム、雲梯、登り棒などの固定遊具遊びは、いずれも高さに関係する遊びで、ブランコは地上を離れてゆれる不安定さを経験する遊具である。全身を動かして遊ぶ楽しさ、おもしろさを知るのは、この高さや不安定さの中で遊ぶことから始まる⁷⁾とされている。高い場所に自分なりの動きで達することのできるような遊びに取り組むことで、様々な全身の動きを身に付け、全身的な運動遊びの幅が広がると考えられる。ボール遊びや集団遊びは、それらの遊びを通して異年齢児との交流が図られ、競争や協同という側面に加えて、相手への思いやりを発達させる機会ともなる。そこでは、集団の一員として認められるような運動遊び、すなわち人と人との関係を深めるじゃれつきながら遊ぶことや鬼ごっこ・ボール遊びなどの群れて遊ぶことなど年齢に応じた遊びの発展が期待されている。

「自然の遊び」や「散歩」という回答も多く、園の自然環境に合わせて虫探しや草花遊び等で楽しんでいる様子が伺える。

以上のことから、園庭は遊びを創造させ、様々な遊びへと発展できる場である。また、クラスを超えた交流の場としての価値は高いと考えられる。

遊戯室（ホール）は保育室よりも広い空間である場合が多く、行事での使用や悪天候の際の園庭での遊びに代わる場となるなど、その用途も多岐にわたっている。遊戯室（ホール）で行われてい

る遊びについては、体操・ダンス、マットや飛び箱を活用した大型遊具遊びなどの回答が多く、空間の特徴を活かした活動となった。体操・ダンスは、用具を必要とせず、リトミックやリズム運動など様々な種類が挙げられ、日頃から活動に取り入れやすいと考えられる。さらに、運動会、発表会などの行事でダンスを披露する機会もあり、体操・ダンスはあらゆる場面で活用することができるのではないだろうか。また、マットや飛び箱などの大型遊具遊びについては、幼小接続期の活動として小学校体育への円滑な接続を意識しているものと考えられる。マットや飛び箱、平均台は幼児の人数に応じて準備しやすいという特徴や環境に応じた動きを作り出すことができ、遊びの内容を創工夫することが可能である。

この他にも、ボール遊びなど園庭と同様な内容の運動遊びも取り入れられていた。園庭よりも狭い空間での運動遊びとなるため遊び方の工夫や安全面の配慮が必要となる。保育士は子どもの遊びを極端に制限することなく、十分に楽しく活動できるように保育環境を日々整える取り組みをしていると考えられる。

保育室では、園庭や遊戯室（ホール）と比較するとより狭い空間となるため、運動遊びというよりもブロック遊びや制作遊び、ごっこ遊び、絵描き・塗り絵などの遊びが多く行われていた。通常保育室内には、机や椅子、ロッカーなどが置かれているため動的な遊びは制約を受けることが多く、幼児は机や椅子を使って静かに遊んでいるのが一般的である。しかし一方で、ダンス（40.0%）やボール遊び（24.0%）という回答もあった。運動遊びが十分にできる空間とは言い難いが、幼児の好きな遊びを中心に取り組んでいると考えられる。保育室は幼児が自分のクラスとして理解し、安心して自分の好きな遊びを行うことができる空間としての意味を持つもの⁸⁾と考えることができる。

2 保育士が幼児と一緒に体を動かして遊ぶ頻度について

保育士の88.0%が毎日、またはほぼ毎日幼児と

体を動かして遊んでおり、幼児と一緒に体を動かしながら保育をする意識は非常に高いと考えられる。このことは、遊びを中心に構成されている幼児の生活において、体を動かすことは必要不可欠であり、保育士自身においてもそのことが認識されている結果であると考えられる。保育現場の状況について、具体的な運動指導（技術指導）の場面では、補助的な役割や傍観的な立場にすることが多く、指導内容や方法を運動指導者に全体的にまかせる傾向があり、幼児期の運動の在り方に関する保育者の認識にも課題がある⁹⁾と指摘する声もある。保育士の中には運動に対して苦手意識を持ってしまっていることや、保育士自身が運動遊びの経験が少ないケースがある。吉田らは、「運動が得意でなくても子どもと一緒に動くことを楽しめたり、コツを教えられたり、時にはお手本となって子どもの憧れの存在になったりすることが子どもの動きや遊びを誘発する」¹⁰⁾としている。ここからも、幼児と毎日、生活や遊びを共にしている保育士が、体を動かしながら活動する意義は大きいと考えられる。

3 運動遊び・遊びの場面で保育士が幼児の課題として感じること

保育士は、幼児の運動遊びの経験（生活経験）不足や体の操作が未熟であることを課題として捉えている。「ボール投げ、縄跳びが経験不足からできない子どもが多い。」「遊具や道具の使い方が分からない。」「転んでも手がつかない。」「スキップなどの動作がぎこちない。」など、運動遊びの経験（生活経験）不足から幼児がうまく体をコントロールすることができない現状が指摘されている。幼児は、様々な動きを経験しながら、自分の体を上手に操作できるようになることから、この2つの関連は強いと考えられる。

また、次に「運動能力の低い子どもが多い」、「体力の低い子どもが多い」という回答数が多かったことから保育士が幼児の運動能力や体力面に不安を感じていることがわかる。それぞれの発達段階で経験しながら身に付けていくバランス感覚や

リズム感、基礎的な体力等、様々な能力が幼児期に十分に身につけていない現状が指摘されている。また、同じクラスでも個々の幼児の身体機能や運動能力にも差が見られ、その結果運動遊びなどの内容に影響が出始め、個人差への対応に苦慮している様子うかがえる。

そして、「体を動かすことを好まない子どもや苦手意識を持った子どもが多い」や「体を動かして遊ぶ時間が少ない」と感じる保育士は約30%の割合を示しており、体を動かすことを好まず、体を動かして遊んでいる時間が少ない幼児も一定数存在していることが示された。

「運動遊びの経験（生活経験）不足」についての自由記述（表6）では、経験不足から発達段階に応じた動きができないという意見や保育園で初めて運動遊びの内容を経験することが多いといった記述があった。保護者が安全面を優先することが、運動遊びの機会減少につながっている意見も見られていた。以前なら日常生活や毎日の遊びの中で身に付けてきた動きが、十分に獲得できず、からだの動きの能力の未発達、感覚の鈍化といった影響が幼児期の育ちの不安へとつながっている。就学前の家庭や地域の生活や遊びを通して身体と動きの耕しが不十分となり、その後の陸上、器械運動、球技などのスポーツ文化の学習において落ちこぼれてしまう子どもが増えていくことが心配される。

「体の操作が未熟な子どもが多い」についての自由記述（表7）では、転んだ時に手が出ずに顔面に怪我をする子どもがいるという記述が多かった。また、運動遊び中にバランスを崩したり、自分の体を支えられなかったりするといった体の使い方がスムーズではない子どもの動きが気になるという指摘があった。身体の動きや身体を使った遊び場面における子どもの不器用さやぎこちない動きについて、川島らは、低い運動パフォーマンス自体を一次的影響と言い、そしてそのことによる運動への消極的参加や自己並びに他者評価の低さを二次的影響¹¹⁾としている。思いきり遊びたいと思うがそれができず、失敗経験を重ねて自尊心

情を下げてしまうとともに、対人関係形成や集団参加に影響を及ぼし、周囲の人々のその子どもに対する評価に影響を与えてしまう。保育施設だけの問題ではなく、就学後の学習への影響も考えられる。不器用さやぎこちない動きは適切な支援のもと運動に参加することで解消されることも可能となるため、運動遊びへの参加の機会を増やし、具体的な遊びの支援の創造・構築が必要である。

「運動能力の低い子どもが多い」「体力の低い子どもが多い」についての自由記述(表8)では「疲れた」という子どもが増え、すぐに座り込んでしまう、鬼ごっこや追いかけっこが持続しないなど体力面に不安を指摘する記述が多かった。運動能力に関しては以前よりも鉄棒の前回り、逆上がりなどができなくなっているといった記述があった。乳児から幼児期にかけては、身体機能全般の発達が著しい時期である。特に身のこなし、器用さにつながる神経系の発達が著しい。この神経系の発達のピークは5、6歳がピークで、普段の生活で必要な動きをはじめ、とっさの時に身を守る動きや将来的にスポーツに結びつく動きなど多様な動きが身に付けやすくなる。神経系の発達が著しい幼児期に運動遊びを通して多様な動きを身に付けることは、運動を調整する能力も高まり自分の体をコントロールすることができ、健康な生活を送る基盤づくりにもつながると考えられる。

「体を動かすことを好まない子どもや苦手意識を持った子どもが多い」「体を動かして遊ぶ時間が少ない」についての自由記述(表9)では、運動遊びよりも静的な遊びを好む子どもが多い、友だち同士で活動しようとせずに無関心な姿勢でいる子どもが多いという記述があった。苦手意識があると座って見ているだけの子どもも多く、その結果、運動遊びの時間が少なくなっていると考えられる。今後は、苦手意識を持ち運動遊びに意欲的に取り組むことができない幼児に対し、保育者は幼児が自分の好きな、また自分ができる運動遊びを楽しむことができる環境を整え、個々の幼児に応じた援助をしながら、幼児ができた体験を積み重ねて苦手意識を少なくしていくような運動遊

びの内容や活動のプロセス等への工夫¹²⁾がより一層求められる。

VI おわりに

本研究において、保育施設では、園庭、遊戯室(ホール)、保育室それぞれの空間の特徴を活かし多様な運動遊びが行われていることが明らかになった。保育所保育指針で示されている環境を通して行う保育という言葉からも、常に保育施設内の物的環境、人的環境などの活用と更なる充実を図っていく必要がある。本来は、子どもの自主的な遊びが豊かに展開されることを願って改定されたはずの幼稚園教育要領や保育所保育指針だが、稚丸は、幼児教育・保育現場において子どもの遊びが豊かに展開されるようになったという保育者の実感はあまりない¹³⁾と危機感を示している。幼児の生活時間が最も長い保育園や幼稚園の生活が運動発達に影響がある¹⁴⁾という結果もあり、幼児の発育に不可欠とされる遊びに必要な条件である、遊び友達、遊ぶ場所、遊び時間が完備されている、最も優れた空間での生活時間は幼児にとって重要であると言える。

そこで中心的な役割を果たしているのは、毎日幼児と生活や遊びを共にしている保育者である。本研究のアンケート結果からも、運動遊びの際に、保育士自身も幼児と一緒に体を動かして遊んでいる割合が高いことが示された。保育者には、幼児自身が好み、自分の発達段階に合わせた運動遊びを楽しむことができる環境を整え、個々の状況に合わせて援助し、幼児ができたという成功体験を積み重ねていくような運動遊びの内容の構築が求められる。一人ひとりの発達や興味・関心、毎日の幼児の遊びの実態を把握し、そこにおける課題を模索し、保育者同士が連携を図りながらよりよい遊びの環境を整えていくことがさらに望まれるのではないだろうか。

石倉らは、保育施設がそれぞれに分析を行い、各遊び場において、期において、発達段階において、どのような遊びの質が内在するのか、その傾向性や特徴をつかんでいくこと、それらを踏まえ

た新たな経験の可能性についても園全体で話し合い、試行錯誤していくことが肝要であろう¹⁵⁾と述べている。園庭、遊戯室(ホール)、保育室などの環境は、園によって様々だが、そこには各園特有の遊びの質が内在していると考えられるため、傾向性をとらえる意味でも重要な取り組みであると考える。

幼児期において必要と思われる身体活動の確保が課題となる中、これらのニーズに対応するためにも、幼児の大半が通う保育施設における運動遊びの現状を明らかにし、整理したことは多少なりとも意義があったのではないかと考える。幼児の身体活動を伴った運動遊びは、保育者によって運動遊びの意義を踏まえた保育活動が営まれるのが前提である。保育観や経験年数などが影響するとも考えられる。そのため、保育者の運動遊びに対する意識を明らかにすることで、保育施設における運動遊びの研究に求められる課題もより明確になるのではないかと考える。

今後の課題としては、第1に保育施設の実態に即したこれらのデータの更なる蓄積を行うことである。第2に保育現場における運動遊びのニーズを的確に捉えるためにも観察による実証的研究によるアプローチも必要であると考えられる。実証的な研究を進める中で、幼児の主體的な運動遊びを引き出すための具体的な人的、物的環境の構成の在り方や運動遊びの支援の方法を検討することが望まれる。

付記

本研究のアンケートに協力してくださった先生方に深く感謝いたします。なお、本研究の一部は、2023年度宮城学院女子大学の研究助成を受けて行われたものである。

文献

- 1) 野田美樹 (2010) 「運動する意欲を育てる保育研究—幼児の心が動く場面を手がかりに」、国際研究論業, 22(3), pp.41-53.
- 2) 智原江美 (2011) 「幼児期の発育発達からみた運動

遊びの考え方」、京都光華女子大学短期大学部研究紀要, 49, pp.7-17.

- 3) 杉原隆・河邊貴子 (2014) 「幼児における運動発達と運動遊びの指導」、ミネルヴァ書房, pp.31-167.
- 4) 文部科学省 (2017) 「幼稚園教育要領 比較対照表」、p.16.
- 5) 大木みどり (2018) 「幼児期の運動遊びの実態と課題—保育者が指導・援助する上での課題」、羽陽学園短期大学紀要, 10(4), pp.395-406.
- 6) 前掲書 5)
- 7) 近藤充夫 (2013) 「幼児とこころと運動」、教育出版, p.29.
- 8) 前掲書 5)
- 9) 吉田伊津美・岩崎洋子 (2014) 「園での運動遊び指導と運動遊び指導に対する幼稚園教諭の認識—園での運動遊び指導に対する満足度と技術指導志向からの検討」、発育発達研究, 64, pp.18-24.
- 10) 吉田伊津美・岩崎洋子 (2012) 「幼稚園における運動指導の実態と教員の運動指導に対する意識—国公立幼稚園と私立幼稚園との比較」、東京学芸大学紀要(総合教育科学系), 63(10), pp.107-113.
- 11) 川島民子・奥田援史 (2019) 「幼児の身体的不器用さの特徴に関する研究」、滋賀大学教育学部研究紀要教育科学, 69, pp.45-52.
- 12) 前掲書 5)
- 13) 穂丸武巨 (2004) 「幼児の体力・運動能力 30年間の推移と問題点」、体育科教育, 52(12), pp.24-28.
- 14) 前掲書 13)
- 15) 石倉卓子・竹田好美・岩城愛・水島志穂子・横田美咲 (2019) 「認定こども園の園庭における遊びの質を考える—保育教諭がとらえた幼児の経験から」、富山国際大学子ども育成学部紀要, 10(2), pp.1-25.